所要時間を表示する前置詞の共通点と相違点

武本 雅嗣

1． はじめに

言語間で同根の内容語の意味が違っていることはよくあるが、同根の機能語の用法が異なっていることも珍しいことではない。インド・ヨーロッパ祖語の *en が源と考えられている内側や範囲を表示するために用いられる前置詞にしても、諸言語が共有する用法もあれば共有しない用法もある。まずは、英語の in とフランス語の en の空間用法を比べてみよう。(1) の英語とフランス語は同じ意味を表す。

(1) a. The artist was born {**in** East Germany / **in** the former East Germany}.
　　b. L'artiste est né {**en** Allemagne de l'Est / {?**en** / **dans**} l'ancienne Allemagne de l'Est}.

(1b) では、定冠詞が付くと圧倒的に dans のほうが好まれる。フランス語の前置詞 en の空間用法は英語の in と比べると明らかに狭く、文学作品では en が定冠詞の女性単数形 la や男性・女性単数の縮約形 l' を伴う場所名詞と結びついている事例がみられるものの、口語では、慣用的に定まったものでなければ、そのコロケーションはほとんどなくなっている[1)]。

ただ、フランス語の en は無冠詞名詞とは結合するので時間表現ではよく用いられ、英語の in 同様所要時間を表す用法ももっている。たとえば、次の (2b) においては dans ではなく en が使われる。

(2) a. They completed the task **in** four weeks.
　　b. Ils ont accompli la tâche {**en** / ***dans**} quatre semaines.

しかしながら、このような時間表現の場合もフランス語の en の用法は英語の in よりも狭い。次の場合、英語では同じ前置詞 in が使われるが、フランス語では en ではなく dans のほうが用いられる。

(3) a. They will have completed the task **in** four weeks [from now].

---

1) フランス語の前置詞 en の空間用法の制約はロマンス語の中でも特殊である。なお、国名以外の場所の名詞でも次のように無冠詞なら en とともに用いられるが、その場合は英語同様具体的な場所ではなく抽象的な状態にあることを表す。

(i) a. He is **in** prison. (cf. He is **in** the prison.)
　　b. Il est **en** prison. (cf. Il est **dans** la prison.)

b. Ils auront accompli la tâche {***en** / **dans**} quatre semaines.

(2) と (3) の時間副詞の意味の違いは日本語で言えば「4週間で」と「4週間後に」ということになるが、後者の意味を表す用法は英語の in にはあるのに対し、フランス語の en にはなく、その代わりそれに類する前置詞が用いられる。英語では (2a) のような用法は基本用法で、(3a) のような用法は拡張用法とみなされるが、フランス語のほうでは (2b) と (3b) では意味が違うので前置詞が使い分けられているということになる。

では、内側や範囲を表示する前置詞の時間用法に関して、英語のような用法拡張は一般的で、フランス語のような制約は特殊なのだろうか。フランス語の en は空間用法がロマンス語の中でも著しく狭いことから、時間用法も同じように特別に制限されていると思われるかもしれないが、実は同種の前置詞の交替は他のロマンス語でもみられる。少し視野を広げてみると、時間の幅を表す前置詞の拡張用法をもつ言語は英語の他にもあるし（ドイツ語など）、拡張用法はないものの類似した前置詞を用いる言語もフランス語以外にあるし（スペイン語、イタリア語など）、また、その場合にまったく異なる前置詞を充てている言語（オランダ語、ルーマニア語など）もあることがわかる。このような現象は形式と意味の関係を考えるうえで非常に興味深い。我々の関心はとくに次の三つの点にある。一点目は、英語などではどのような要因で用法が拡張したのかということ。二点目は、フランス語などではなぜ類似した前置詞が交替するのかということ。そして三点目は、まったく異なる前置詞を用いる言語の間に共通性はあるのかどうかということである。本稿では、ゲルマン語とロマンス語の諸言語をもう少し広く観察し、所要時間を表示する前置詞の用法拡張と時間の概念の細分化ならびに時間幅の捉え方について考察を行う。

2. 所要時間を表示する前置詞の用法拡張

2.1 基本用法の有界性の制約

英語の in と同様の用法拡張はドイツ語の in にもみられるが、基本的には同じなので、本章では用法拡張について英語の例を挙げて論じることにする。まず、in X time の用法を浮き彫りにするために、Dowty (1979) をはじめ多くの研究者に指摘されているとおり、事態の継続時間を表す for X time と事態の所要時間を表す in X time の間には有界性（telicity）に関して決定的な違いがあることを踏まえておきたい。for X time と共起する典型的な動詞は (4) のような状態動詞や活動動詞で、基本用法の in X time と共起する典型的な動詞は (5) のような達成動詞である。

(4) a She lived in New York **for** seven years.（live：状態動詞（state））

b. The athlete ran on the track **for** forty minutes.（run：活動動詞（activity））

(5) My father built this house **in** six months.（build：達成動詞（accomplishment））

しかしながら、for X time とも in X time とも結びつきうる場合がある。

(6) a. He read a book **for** an hour.「彼は1時間本を読んだ」 (atelic)

b. He read a book **in** an hour.「彼は1時間で本を読んだ」(telic)

それは、(6) の He read a book が両義的だからである。活動動詞である read 自体には有界点は内在していないが、動詞句の read a book は「読書する（ある本を読む）」という非有界的な解釈と「読了する（本を一冊読む）」という有界的な解釈が可能である。述語が非有界的な事態を表す場合には継続時間を示す for が用いられ、それが有界的な事態を表す場合には所要時間を示す in が用いられるわけである。このような事実から、有界性（telicity）は、必ずしも動詞の語彙的アスペクトの問題ではなく、動詞句が表す事態のアスペクトの問題とみなされる。そして in X time が用いられるのは、動詞句が表す事態が有界的（telic）な場合ということになる。

それゆえ、基本用法の in X time と共起する典型的な動詞は有界点を内在する達成動詞なのであるが、たとえそれが活動動詞であっても、有界性さえ担保されていれば in X time によって行為の遂行に要する時間を表しうる。

(7) Usain Bolt ran 100 meters **in** 9.58 seconds.（run：活動動詞（activity））cf. (4b)

また、その動詞が一瞬の出来事を表す到達動詞であっても、所要時間を表示する in X time が用いられることもある。

(8) You can reach the summit **in** about five hours.（reach：到達動詞（achievement））

この in about five hours もやはり有界点（頂上への到達）までに要する時間を表している。動詞が表す事態自体は瞬間的であっても、そこに至るまでの過程が読み込まれると、その過程で要する時間が in X time で表されるわけである。このように、典型的でない場合も含めて、事態の完遂までの所要時間を表す前置詞 in の本質的機能は、「要する時間幅」の表示なのである。

2.2 基本用法と拡張用法の共通点と相違点

用法拡張の要因について考察する前に、英語とフランス語を併記し、事態と時間幅の捉え方を図示することによって、両用法の共通点と相違点を明らかに

しておく。

次の (9a) や (10a) のような in X time の基本用法では、図1のように、事態の展開と完結は発話時（S：Speech time）と関係のなく基準時（R：Reference time）（たとえば「昨日」や「明日」）の in X timeの時間幅に収まっている[2)]。

(9) a. He did his homework **in** two hours yesterday.
　　b. Il a fait ses devoirs **en** deux heures hier.
(10) a. He will do his homework **in** two hours tomorrow.
　　b. Il va faire ses devoirs **en** deux heures demain.

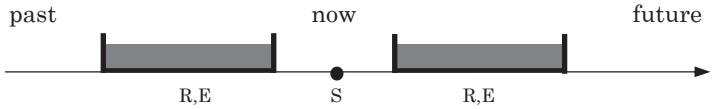

図 1

このように、基本用法の場合、時間幅は時間軸上どこにでも設定しうるので、出来事時（E：Event time）の時制的な制約はない。それはフランス語の場合も同じで、(9) と (10) のように、要する時間幅を表す英語の in の基本用法とフランス語の en の用法は合致している。

問題は、発話時が基準時となって出来事時に関与する場合である。その場合、事態が in X time の時間幅に収まる解釈とその枠外に隣接する解釈の可能性がある。たとえば、(11a) と (12a) のように、「2時間で宿題をする」は「2時間のうちに宿題をし終える」という解釈のほかに「今から2時間経ったら宿題を開始する」という解釈が可能である[3)]。

(11) a. He will do his homework **in** two hours.
　　b. Il va faire ses devoirs **en** deux heures.

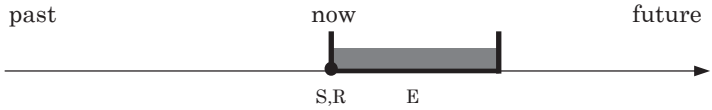

図 2

2）以下の図における ▬ は一定の時間を要する事態を、▮ は一瞬の事態を、▭ は読み込まれた過程的事態を示している。

3）この後者の読みを、Móia (2006) はポルトガル語の分析において time-anchored reading と呼んでいる。

(12) a. He will do his homework **in** two hours [from now].
b. Il va faire ses devoirs **dans** deux heures.

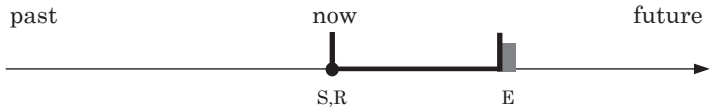

図 3

前者の解釈では、図2のように「宿題の完遂」は2時間の時間幅に（必ずしも2時間きっかりというわけではないが）収まっており、この場合の英語の in の用法は基本用法なので、フランス語では (11b) のように en が用いられる。それに対して、後者の解釈では、in two hours は in two hours from now または in two hours' time を意味し、図3のように事態の実現（宿題の開始）は2時間の時間幅の枠の外側に接した時点に定位される。この場合の英語の in の用法は拡張用法なので、フランス語では (12b) のように dans が用いられることになる。英語の拡張用法の in X time ならびにフランス語の dans X time と事態の関係はこのように捉えられるがゆえに、(12a) の in two hours も (12b) の dans deux heures も「2時間後に」を意味することになるわけである。

たとえ動詞が finish のような終了相の瞬間動詞であっても基本的には同じ構図である。(13) の図4のように、終了までに遂行される行為まで読み込まれれば一定の時間を要するので、やはり事態は in X time の時間幅に包摂されたかたちで捉えられるが、(14) の図5のように、一瞬の出来事として行為の終了だけが焦点化された場合は、事態は時間幅の外側に定位されるかたちで捉えられる。

(13) a. He will finish his homework **in** two hours.
b. Il va finir ses devoirs **en** deux heures.

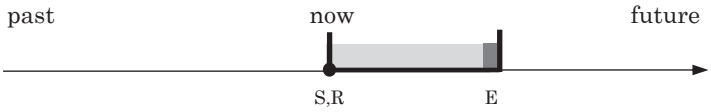

図 4

(14) a. He will finish his homework **in** two hours [from now].
b. Il va finir ses devoirs **dans** deux heures.

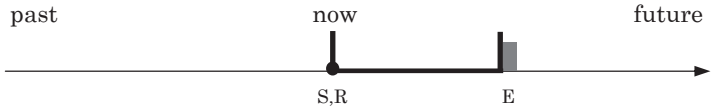

図 5

以上のことをまとめると、事態の完遂までに「要する時間幅」を表示するのが in X time の基本用法であるのに対し、事態の実現（再開を含む）までに「要する時間幅」を表示するのがその拡張用法であるということになる[4)]。このような事態と時間幅の関係の相違は、前置詞を使い分けるフランス語では明示的だが、一つの前置詞の用法が拡張している英語では非明示的なのである。ただ、英語では、もっとはっきりと内側を指示するためには前置詞 within が用いられるようになっている。注目すべきは、英語の within やドイツ語の innerhalb ‘inside, within’ などとフランス語の dans やスペイン語の dentro de ‘inside, within’ などは共により明確に空間的な内側を表すにもかかわらず、この種の時間用法では異なる意味を表すという点である。このことについては3章で詳述する。

2.3 用法拡張の要因

このような拡張用法をもつ英語とそれをもたないフランス語の違いは、概念・意味と形式の関係を考えるうえで非常に興味深い。では、英語ではなぜ用法拡張が生じたのであろうか。その要因として考えられるのは類推や推論の関与であろう[5)]。上に挙げた (12) を再掲し、それを基に検証することにする。次の (15) の英語とフランス語の文はそれぞれ (16) のようにパラフレイズされる。

(15) a. He will do his homework in two hours [from now]. (=(12a))
b. Il va faire ses devoirs dans deux heures. (=(12b))
(16) a. He will start his homework in two hours.
b. Il va commencer ses devoirs dans deux heures.

---

4) (14) は、コンテクストによっては、「今から2時間後に終える」という意味のほか、「今から2時間後にまた始めて終える」という意味もありうる。その場合、英語の拡張用法の in ならびにフランス語の dans はインターヴァルを表しているわけであるが、やはりそれらが要する時間幅を表示していることにはかわりない。

5) 用法拡張に語用論や推論が関与しているという考え方については、京都産業大学の平塚徹氏から個人的にいただいた示唆に富む助言がヒントになっている。ただ、ここでの主張の責任はもちろんすべて筆者にある。

このことから、英語の in X time の拡張用法は事態の遂行に要する時間を表すものではないということは明らかである。(15) のような文から推論が働くならば、「今から2時間で宿題をする」ということは「今から2時間後には宿題を終えている」と解釈されてもよいはずである。しかし、この文には「今から2時間後に宿題をし始める」という読みしかない。ということは、in X time の用法拡張は推論が契機になったとはみなし難い。また、基本用法の場合とは異なり、拡張用法の場合は、所要時間を表す構文 it takes X time to inf. にパラフレイズすることはできない。フランス語でも同じだが、英語の例だけを示す。

(17) a. He did his homework in two hours.（基本用法）
　　 b. It took him two hours to do his homework.（(17a) と同じ真理値を表す）
(18) a. He will do his homework in two hours [from now].（拡張用法）
　　 b. It will take him two hours to do his homework.（(18a) と同じ真理値を表さない）

以上のことから、in X time は基本的には所要時間を表すとはいえ、その本質的な機能はやはり要する時間幅を指定することにあるとみなすことができる。一見基本用法と拡張用法の間に意味的類似性はないように思われるが、上に示した図2と図3のように、基本用法の場合でも拡張用法の場合でも、要する時間の幅の設定がある。その時間幅は、基本用法の場合は「事態の完結までに要する時間幅」、拡張用法の場合は「事態の実現までに今から要する時間幅」であり、ともに telic な事態が「要する時間幅」をもって捉えられているという点では共通している。前置詞 in はその類似性の認識に基づいて同じように用いられるようになり、それにともなってそれが表す意味は推論により変化したと考えられる。つまり、概念的に認められる「要する時間幅」から類推が働いて in の使用が拡大するとともに、「事態実現までに要する時間幅がある」ということは「事態実現はその時間幅を超えた時点である」という推論により in が担う意味も拡大する。認知言語学の観点からは、類推による用法拡張・意味変化はメタファーとみなされ、推論によるそれはメトミニーとみなされるので整理して言えば、英語の in の拡張的な使用はメタファーによって誘発され、それに伴ってその意味はメトニミーによって変化し、その拡張用法は語用論的強化によって定着したということになる。一方、フランス語の場合は、英語の場合と同じように「要する時間幅」が捉えられてメタファーは作用しているものの、そこからのメトニミカルな転義は本義とはずれているので、同じ前置詞ではなく、en と同じように限定的な幅を表す、いわば似て非なる前置詞 dans を充ててその異なる意味を担わせていると考えることができる。この認知意味論的説明は、英語やドイツ語における用法拡張の説明にも、また、フランス語に限ら

ずロマンス語における原初的前置詞と派生的前置詞の使い分けの説明にも有効であろう。

3. ゲルマン語とロマンス語

3.1 原初的前置詞の拡張用法の有無

源を同じくする前置詞が「要する時間幅」を表示する用法をどれほど広く共有しているかを知るためにはインド・ヨーロッパ語族内の言語を網羅的に調査する必要があるが、ここでは手始めに、ゲルマン語3つ（英語・ドイツ語・オランダ語）とロマンス語3つ（フランス語・スペイン語・イタリア語）の計6つの言語を比べてみることにする。わずかではあるが、これだけでもこの種の時間表現の共通性と多様性が垣間見える。

内側や範囲を表す原初的な前置詞の基本用法（「（時間）で」）については、(19) のようにこれら6つの言語すべてにみられる。それに対して、その拡張用法（「（時間）後に」）は、(20) のようにどの言語にもあるわけではなく、別の前置詞が用いられる言語のほうがむしろ多い。(19) と (20) はそれぞれすべて同じ意味を表している。

(19) a. The train goes from Florence to Venice **in** two hours. (Eng)
b. Der Zug fährt von Florenz nach Venedig **in** zwei Stunden. (Ger)
c. De trein gaat van Florence naar Venetië **in** twee uur. (Dut)
d. Le train va de Florence à Venise **en** deux heures. (Fre)
e. El tren va de Florencia a Venecia **en** dos horas. (Spa)
f. Il treno va da Firenze a Venezia **in** due ore. (Ita)

(20) a. The train for Venice leaves **in** two hours. (Eng)
b. Der Zug nach Venedig fährt **in** zwei Stunden ab. (Ger)
c. De trein naar Venezia vertrekt **over** twee uur. (Dut)
d. Le train pour Venise part **dans** deux heures. (Fre)
e. El tren para Venecia sale **dentro de** dos horas. (Spa)
f. Il treno per Venezia parte {**tra** / **fra**} due ore. (Ita)

この中では、英語とドイツ語には拡張用法があるので前置詞の交替は起こらないのに対し、オランダ語とフランス語とスペイン語とイタリア語では、言語によって使い分けの厳格性の差はあるものの、基本的には代替え前置詞が用いられるようになっている。オランダ語ではまったく異質の前置詞が使われるが、ロマンス語の間には共通点がある。それは、内側や範囲を指定する原初的な前置詞から派生した、それ以上に明確に内部や間を指定する前置詞ないし前置詞

的要素が用いられるという点である。次節ではこのことについて考察し、オランダ語の前置詞については次々節で取り上げることにする。

3.2 派生的前置詞の時間用法の語派間の相違

ゲルマン語でもより明確に内側を表す前置詞は、内側を表示する原初的な前置詞から派生したものまたはそれを含む複合前置詞なのだが、ゲルマン語の場合は、空間用法と時間用法の間にロマンス語の場合のような意味的な乖離はない。原初的な前置詞 in を内包する英語の複合前置詞 within（with + in）は時間用法で「（時間）以内で」と明確に時間幅の内側を表すし、ドイツ語の *inner* 'inner' と *halb* 'side' が結合した innerhalb 'within, inside' も、また、オランダ語の *be* 'by' と *innen* 'within, inside' が結びついた binnen 'within, inside' もやはり時間用法で「（時間）以内で」と明確に時間幅の内側を表す。ドイツ語とオランダ語の空間用法と時間用法の例を挙げる。

(21) a. Etwa 12,000 Personen wohnten **innerhalb** der Stadtmauern.（Ger）
'About 12,000 people lived within the city walls'
b. Der Krankenwagen war **innerhalb (von)** fünfzehn Minuten da.（Ger）
'The ambulance came within fifteen minutes'

(22) a. Houd uw hond **binnen** de perken!（Dut）
'Keep your dog within the boundaries'
b. Mijn vader zal **binnen** drie weken terugkomen.（Dut）
'My father will return within three weeks'

英語・ドイツ語・オランダ語ではこのような複合前置詞が時間幅の枠の外側を指定することはないのだが、フランス語やスペイン語やイタリア語では、空間的に明確に内側や間を表す前置詞が時間用法で時間幅の枠の外側を表示するために用いられるようになっている。これらのロマンス語の前置詞は一見関連がないように思われるが、すべて内側や範囲を表す原初的な前置詞からの派生形ないし派生形を含んだものであるという点に共通性がある。フランス語の dans 'in' はラテン語の *de* 'from, of' と *intus* 'within, inside' が融合したもの、スペイン語の dentro 'within, inside, in' はラテン語の *de* 'from, of' と *intro* 'within, inside' が結合したものであり、出自はほぼ同じである。イタリア語の tra 'between, among, in' と fra 'between, among, in' は複合前置詞ではないが、やはりそれぞれラテン語の in 'in' から派生した *intra* 'within, inside'、*infra* 'below' に由来する音韻脱落形である。スペイン語とイタリア語の空間用法と時間用法の例を挙げる[6)]。

6）ポルトガル語の dentro もスペイン語同様 de を伴って前置詞的要素として用いられるが、様々な翻訳を観察するとスペイン語ほどは多用されないし、イタリア語の

(23) a. El accidente ocurrió **dentro del** edificio. (Spa)
'The accident happened inside the building'
b. Llámame **dentro de** diez minutos. (Spa)
'Call me back in ten minutes'
(24) a. Il fiume scorre **tra** i due paesi. (Ita)
'The river flows between the two countries'
b. Si sposeranno **tra** un mese. (Ita)
'They will get married in a month'

概して中心的な用法から周辺的な用法になるにつれて言語間の違いが大きくなっていくものだが、以上のことから、空間用法よりも時間用法に、そして時間用法の中でもその基本用法よりも拡張用法に言語間の相違があることがみてとれる。もちろんこれだけの言語を比較・対照しただけで語派の特徴と断定することはできないが、少なくとも英語・ドイツ語とフランス語・スペイン語・イタリア語の間には、内側を表す原初的な前置詞から派生した、より明確に内側を表示する前置詞の時間用法に大きな相違があることは指摘できる。英語やドイツ語の場合は、複合前置詞の時間用法は明らかに空間用法と類似しており（「(空間）内に」→「(時間）以内に」)、空間用法からの単純なメタファー的転用になっている。それに対して、フランス語やスペイン語やイタリア語の場合は、派生的前置詞の時間用法は空間用法とさほど類似していないので（「(空間）内に」「間に」→「(時間）後に」)、一見用法拡張の要因はまったく異なっているようにみえる。しかしながら、それらが空間用法から時間用法になっても、「範囲を限定する」機能は保持されているので、やはりメタファーが働いているとみなされる。これはまさに、概念的比喩における起点領域から目標領域への機能の写像（mapping）である。

3.3 異質な前置詞の共通性と原初的前置詞の用法拡張の兆候

最後に、英語からロマンス語への翻訳を示したうえで、原初的前置詞とはまったく異なる前置詞の時間用法について説明するとともに、ロマンス語の多様性と地域差ならびに使用傾向から窺えることを指摘しておきたい。(25) は英語の in の拡張用法の実例とそのフランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・ルーマニア語への翻訳であるが、どのロマンス語でも、英語の in

dentro は純粋に場所の副詞なのでスペイン語のような時間用法はもっていない。また、これらのロマンス語の dentro と源を同じくするルーマニア語の dintru にもこのような時間用法はない。なお、イタリア語の entro には英語の within に相当する「(時間）以内に」を意味する時間用法がある。

に対応するものとして、ラテン語の in 直系の前置詞は使われていない。

(25) a. ‘Come back **in** an hour, Ferdie.’（*The Great Gatsby*：83）
b. — Ferdie, revenez **dans** une heure.（Fre：110）
c. — Vuelva **dentro de** un hora, Ferdie.（Spa：89）
d. — Venha me buscar **daqui a** uma hora, Ferdie —（Por：100）
e. «Ritorna **tra** un’ora, Ferdie.»（Ita：93）
f. — Întoarce-te **peste** un ceas, Ferdie [...]（Rom：107）

なかでもとくに異質なのが、ラテン語の *per* ‘through, along’ + *super* ‘above’ に由来するルーマニア語の peste ‘over’ である。ただ、この種の前置詞が時間表現で用いられることは必ずしも特殊ではない。なぜなら、peste は先に挙げた (20c) のオランダ語の over ‘over’ にあたるもので、(26) と (27) のように、同じように空間用法と時間用法をもっているからである。ルーマニア語とオランダ語の例を挙げて、事態と時間の関係の捉え方を図示する。

(26) a. A sărit **peste** groapă.（Imre 2009）（Rom）
‘He jumped over the hole’
b. Ne vedem **peste** două luni.（Stavinschi 2015）（Rom）
‘We see each other in two months’
(27) a. Hij loopt **over** de brug.（Dut）
‘He walks over the bridge’
b. Haar visum verloopt over vier dagen.（Dut）
‘Her visa expires in four days’

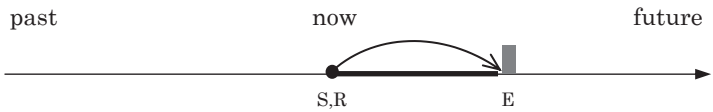

図 6

いずれの言語でも、その前置詞の空間用法から時間用法へのメタフォリカルな転用は、事態の発生と時間幅が図6のように捉えられることに動機づけられたものである。発話時（S）を基準時（R）として出来事時（E）までの時間を「経て」「超えて」という捉え方がなされているがゆえに「（時間）後に」を意味するようになっているわけである。

さて、ポルトガル語の場合であるが、daqui は *de* ‘from’ + *aqui* ‘here’ の縮約形であり、まったく同じというわけではないが英語の from now に相当す

る（cf. フランス語の d'ici 'from here'）。実は、ポルトガル語にもスペイン語とまったく同じ形式 dentro de があり、基本的には用法も同じであるが、様々な翻訳を観察するとスペイン語ほどは用いられず、この daqui のほかに原初的な前置詞 em 'in' の使用例も散見される。どうやら、ポルトガル語における前置詞の選択については地域差が大きいようである。Móia (2006: 58-59) は、ヨーロッパのポルトガルとは異なり、ブラジルのポルトガル語では dentro de の代わりに em も用いられることを指摘している。(28a) はヨーロッパのポルトガル語の例で、(28b) はブラジルポルトガル語の例である。

(28) a. A palestra começa {**daqui a / dentro de**} cinco minutos. (Móia 2006) (Por)
the talk starts {from-here to / inside of} five minutes
'The talk will start in five minutes'
b. A palestra começa **em** cinco minutos. [BP] (ibid)
the talk starts in five minutes

興味深いことに、スペイン語でも同様のことが起こっている。三好 (2016: 122, 126) は、スペインでは dentro de が使われるところで、中南米ではむしろ en を選択するスペイン語母語話者が多いことを指摘している。新大陸では、ポルトガル語同様スペイン語においても、原初的前置詞が拡大使用されているのである。これは、中南米のロマンス語における原初的前置詞の用法拡張とみなすことができよう。ただ、ヨーロッパにおいても、ルーマニア語では同じ現象が生じているようである。ルーマニア語については Stavinschi (2015: 22) が、peste 'over' の「代わりに近頃は în の使用が増える傾向がある」と述べている。

(29) Ne vedem **în** două luni. (Stavinschi 2015) (Rom) (cf. (26b))
'We see each other in two months'

それでも、フランス語では、少なくともフランスのフランス語では、この種の時間表現における en と dans の用法は峻別されており、en の用法拡張の兆候はまったく見受けられない。フランス語では、要する時間幅を表示する2つの前置詞の使い分けは極めて規則的であると言える。ロマンス語では、ラテン語の in 直系の前置詞には英語の in のような拡張用法は原則的にはないことになっているが、用法拡張と思しき現象が起きているのも事実である。先ほど、前置詞の使い分けの厳格性は言語によって差があると述べたのはこのような事実的背景があるからである。

4. まとめ

本稿では、所要時間を表示する前置詞の用法拡張をめぐる諸問題について、複数の言語を比較・対照して共通点と相違点を見極めながら考察を行った。

まず、英語の in X time の基本用法が事態の完遂までに「要する時間幅」の表示であるのに対し、その拡張用法は事態の実現までに「要する時間幅」の表示であり、基本用法の場合でも拡張用法の場合でも「要する時間幅」の設定があるという点で共通していることを示したうえで、発話時が基準時となって出来事時に関与する場合の、フランス語の en にはない英語の in の用法拡張はメタファー（類推）に起因し、それに伴ってメトニミー（推論）により変化した意味が加わり、語用論的強化によって定着したということを指摘した。

次に、フランス語・スペイン語・イタリア語における、内側や範囲を表示する原初的な前置詞とそこから派生したそれに類する前置詞の交替については、やはり英語やドイツ語の場合と同じようにメタファー（類推）は働いてはいるが、概念的・意味的にまったく同じというわけではないので、英語やドイツ語とは異なり、同一ではなく類似した前置詞に置き換えられているということを指摘した。

さらに、内側や範囲を表示する原初的な前置詞とは異質の前置詞が用いられるオランダ語とルーマニア語の空間用法から時間用法への転用の共通性についても、いずれも空間の通過から時間の経過へとメタファー的に転用されて「（時間）後に」を表示するようになっていることを明らかにした。

時間幅を表す原初的な前置詞については、概念的な類似性ゆえに同じ形式が使われて意味が拡大しているのが英語やドイツ語であり、概念的な類似性はあるもののその意味の違いをそれに準ずる形式に委ねているのがフランス語やスペイン語やイタリア語などであるとみなすことができる。これはゲルマン語にはないロマンス語的な特徴であるかもしれないが、現段階では言明はできない。また、ロマンス語の中に原初的な前置詞の用法が拡張し始めている言語があることについても非常に興味深い現象なので、時間名詞の奪格が「（時間）で」も「（時間）後に」も表していたラテン語も含め、今後さらに対象言語を広げて調査し、語派間および語派内の共通点と相違点を見極めていく必要がある。

【引用文献】

Fitzgerald, F. S. (1925): *The Great Gatsby*, Peguin Books (1950).
Fitzgerald, F. S. (1925): *Gatsby le Magnifique*, Bernard Grasset (2007).
Fitzgerald, F. S. (1925): *El Gran Gatsby*, DEBOLS!LLO (2013).
Fitzgerald, F. S. (1925): *O Grande Gatsby*, GERAÇÃO EDITORIAL (2013).
Fitzgerald, F. S. (1925): *Il grande Gatsby*, Oscar Mondadori (2013).
Fitzgerald, F. S. (1925): *Marele Gatsby*, Editura Curtea Veche (2016).

【参考文献】

Albertuz, F.L. (1995) : En torno a la fundamentación lingüística de la Aktionsart, *Verba*, 22, 285-337.

Almeida, M. (2000) : *La Deixis en portugais et en français*, Louvain-Paris: Editions Peeters.

Aparicio, Miguel, Elena (1992): *El aspecto en la sintaxis del español: perfectividad e impersonalidad*, Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid, Madrid.

Buescher, K., & Strauss, S. (2015): A cognitive linguistic analysis of French prepositions *à*, *dans*, and *en* and a sociocultural theoretical approach to teaching them, In K. Masuda, C. Arnett & A. Labarca (Eds.), *Cognitive Linguistics and Sociocultural Theory: Applications to Foreign and Second Language Teaching*, 155-181, Berlin, Germany: De Gruyter Mouton.

Cabredo Hofherr, Patricia (2013): Bare singulars and bare habituals, In Claire Beyssade, Fabio Del Prete, and Alda Mari, (eds.) *Genericity*, 192–221.

Declerck, Renaat (1979): Aspect and the bounded/unbounded (telic/atelic) distinction, *Linguistics* 17, 760-794.

Dowty, David R. (1979): *Word meaning and Montague grammar. The semantics of verbs and times in generative semantics and in Montague's PTQ*, Dodrecht: D. Reidel Publishing Company.

Filip, Hana (2008): Events and maximalization: The case of telicity and perfectivity, In S. Rothstein (ed.), *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*, 217–256, Amsterdam: John Benjamins.

Haspelmath, M. (1997b): *From space to time: Temporal adverbials in the world's languages*, München: Lincom.

Hernández, Patricia C. (2013) : Elementos relacionantes y conceptualización del espacio. El caso de *en* vs *dentro de*: una cuestión de límites, in Delbecque, Nicole, Marie-France Delport et Daniel Michaud Maturana (eds), *Du signifiant minimal aux textes. Études de linguistique ibéro-romane*. Limoges: Éditions Lambert Lucas, pp. 43-61.

Hitzeman, Janet. (1997): Semantic Partition and the Ambiguity of Sentences Containing Temporal Adverbials, *Natural Language Semantics* 5, 87-100.

Imre, Attila (2009): Metaphorical Expressions with *peste*, in *The Proceedings of the International Conference* "*European Integration between Tradition and Modernity*" 3rd edition, Târgu-Mureș: Editura Universității "Petru Maior", 722–734.

Kearns, Kate. (2007): Telic Senses of Deadjectival Verbs, *Lingua*, 117 (1), 26–66. Leeman & C. Vaguer (éds), *Modèles linguistiques*, 53, 111-130.

Lindstromberg, Seth. (2010): *English prepositions explained* (Rev. ed.), Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Martínez, Carmen Solsona (2010): Indicadores de adquisición: los errores en el proceso de aprendizaje de la preposición italiana *tra*/*fra* por parte de

hispanohablantes, *Stvdivm. Revista de Humanidades*, 16, 287-307.
Miguel Aparicio, Elena de (1992): *El aspecto en la sintaxis del español: perfectividad e impersonalidad*, Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid, Madrid.
三好準之助 (2016):「スペイン語の前置詞句 dentro de の時間表現について」『京都産業大学論集』49, 103-128.
Móia, Telmo (2006): Portuguese Expressions of Duration and their English Counterparts, *Journal of Portuguese Linguistics* 5 (1), 37-73.
大橋一人 (2004):「認知的観点から見た事態と時間」『英語学論説資料』38-1, 348-355.
Piñón, Christopher J. (1999): Durative Adverbials for Result States, *Proceedings of WCCFL* 18, 420-433.
Rothstein, Susan (2004a): *Structuring events*, Oxford: Blackwell Publishing.
Rothstein, Susan (2004b): Derived accomplishments and lexical aspect, in J. Gueron & J.Lacarme (eds), *The syntax of time*, 539-553, Cambridge: The MIT Press.
Ryle, Gilbert (1949): *The concept of mind*, London: Barnes and Nobles.
Luraghi, Silvia, Tatiana Nikitina & Chiara Zanchi (2017) *Space in Diachrony*, John Benjamins Publishing Company.
Stavinschi, Alexandra Corina (2015): Romanian, in Konstanze Jungbluth & Federica Da Milano (eds.), *Manual of Deixis in Romance Languages*, Berlin: De Gruyter (Manuals of Romance Linguistics; 6), 17-44.
Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and The Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers.
寺沢芳雄(1999),『英語語源辞典』, 研究社.
Vaguer C. (2006): L'identité de la préposition *dans* : de l'intériorité à la coïncidence, *Modèles linguistiques*, 53, 111-130.
Vendler, Z. (1967): *Linguistics and Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press.